

# 原爆文学研究会報

第七五号

原爆文学研究会 二〇二五年 一二月

## Kajiya Collection 訪問記

後山 剛毅

すこし前のことになるが、二〇二四年三月一七日から三月二三日にかけて、ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館に設置されている Kajiya Collection の閲覧のため、ハワイ州オアフ島を訪れた。二三年ぶりのハワイだ。

Kajiya Collection は、「日本特殊コレクション」の一つであり、日本の小説家である梶山季之（一九二九―一九七五）のすべての蔵書が寄贈されている。「日本特殊コレクション」は、ハワイ大学図書館アジアコレクションに含まれており、なかには Kajiya のほかに「Sakamaki/Howley Collection」「Japanese Language School Textbooks collection」「Performing Arts collection」などのコレクションで構成されている。Kajiya Collection には七千件以上の資料が収蔵されており、以下の七つの項目に分類されている。（一）朝鮮関係文献、（二）日系移民関係文献、（三）南洋関係文献、（四）中国・台湾関係文献、（五）満州関係文献、（六）広島・原爆関係文献、（七）一般文献である。これらコレクションの目録は、ハワイ大学図書館のホームページから確認できる。

ホノルルの目抜き通りであるカラカウア通りから一本奥にはいったクヒ才通り沿いのホテルに宿泊し、ホテルの向かい側のバス停から一三番系統のバスに乗って二〇分ほどでハワイ大学に到着する。調査日は、三月

一八―二〇日（実際には先方の都合で一九日は中止）にかけて、一日四時間以内というのが担当者との約束事だった。バス停を降り、キャンパスの北側に所在するハミルトン図書館に向かう。途中、春休みではあるがスターバックスなどのカフェや大学の公式ショップ、巨大なスポーツジム設備は営業しており、ちらほらと学生の姿も目に映った。

ハミルトン図書館は、本館と別館に分かれており、フロアによっては両館を行き来できる。入場にこれといった手続きもなく、学生スタッフとの待ち合わせ場所も、梶山コレクションの配架室となっていた。本館四〇五号室。エレベーターに乗って四階に向かうだけだと考えていたが、乗ったエレベーターに四階のボタンがなく、すぐ隣のエレベーターや、ちよつと奥に入った場所にあるエレベーターも同様であった。待ち合わせの時間もあるので、学生スタッフにエントランスに来れないか連絡を入れつつ、細身でスキンヘッドのライブライースタッフにエレベーター



について尋ねると、「下で待ち合わせればいいのに」と言いながらも、より奥にあるエレベーターを案内してくれた。「初見殺し」なエレベーターシステムに困惑しつつも、学生スタッフの佐渡さん（経営学部四年生）と無事落ち合うことができた。

ハミルトン図書館は、正式にはトーマス・ヘイル・ハミルトン図書館という。その本館四階にアジア・コレクションが設置されており、フロアの壁などにも「アジア」にまつわる展示が施されている。閲覧

室の横に小さな受付窓口があり、その奥に四〇五号室がある。なかに入ると、閲覧室というよりまさに収蔵庫のイメージで、赤い鉄格子の向こうはスタッフ以外立ち入り禁止となっていた。メモに使えるのは、カメラ、鉛筆、パソコンのみで、それ以外の荷物は、室内のスタッフルームに預けることになった。

今回の渡航は、梶山の作品を紐解くための調査というよりは、梶山コレクションの雰囲気を知ることの比重が大きかった。原爆関係、朝鮮関係、一般文献から性風俗関係まで合計三三冊の閲覧申請をおこなった。書籍の閲覧は必ずスタッフの付き添いのもとでおこなうため、スタッフの都合が合わない日は、これらの特別コレクションを閲覧することはできない。また、閲覧テーブルに置くことができるのは一度に五冊までと決まっていることもあり、調査利用が容易というわけではない。そうしたなか、日本コレクションを担当されている司書の中村充孝さんと学生スタッフの佐渡さんのサポートもあって、無事に調査を終えることができた。最後に中村さんのご好意で、四〇五号室のスタッフルームから梶山の書架の撮影許可をいただいたので、ここに掲載しておく。



## 第七五回 原爆文学研究会報告

二〇二五年八月九日（土）、八月一〇日（日）の二日間で第七五回研究会を開催しました。八月九日については、エコクリティシズム研究会との共催でした。前回と同様、オンライン会議システムを併用したハイブリッド形式で開催されました。

一日目は、エコクリティシズム研究会との共催で、特別シンポジウム「アート・コレクティヴ「爆心へ／To Hypocenter」」が開催されました。

二日目午前は、中野和典さんによる研究発表①「教科書と「原爆文学」V——峠三吉「仮纏帯所にて」を中心に」と勝倉明以さんによる研究発表②「朽木祥「たずねびと」の難しさ——原爆文学教材の実践を通して」が行われました。

二日目午後は、パネル発表「終末論と核表象」と題して、岩本知恵さん、加島正浩さん、林緑子さんによる研究発表が行われました。

一日目のエコクリティシズム研究会と合同で開催したシンポジウム、二日目の研究発表ともに多くの参加者に恵まれ、質疑応答も盛り上がりました。研究発表ではなく参加者がアートプロジェクトに参加するという一風変わった企画も盛り上がりを見せ、充実した研究会となりました。

### ◇特別シンポジウム「アート・コレクティヴ「爆心へ／To Hypocenter」」

八月九日（土）午後は、アート・コレクティヴ「爆心へ／To Hypocenter」から、新井卓さん、小林エリカさん、竹田信平さん、三上真理子さんをお招きし、「爆心へ／To Hypocenter」のプロジェクトの紹介と、それぞれのアート・プロジェクトに研究会の参加者が実際に参加しました。その後の、質疑応答では、「爆心へ」もう一人のメンバーである川久保ジ

ヨイさんにもオンラインで参加いただき、それぞれのプロジェクトの内容について参加者とアーティストが議論を通じて理解を深める場となりました。

## ◇研究発表①

### 教科書と「原爆文学」V

#### ——峠三吉「仮繃帯所にて」を中心に

中野 和典

峠三吉の詩「仮繃帯所にて」（『原爆詩集』一九五一年九月）は、一九五七年度から一九六四年度まで高校の国語教科書に掲載され、しばらく掲載が途切れた後、一九七八年度から二〇〇五年度まで中学校の国語教科書に掲載された。一九五七年度の教科書指導資料には〈敗戦の時のみじめな生活と戦争そのものの惨害について、できれば、当時の実状を父母、兄弟から聞き出させ、それをみんなで持ち寄り話しあいたいものである〉と記されており、この時期には高校生が家族の戦争体験を聞き取り、それを詩の読解につなげるという学習活動が想定されていたことが分かる。一方、一九九三年度の教科書指導資料には〈戦争体験のない世代に（略）戦争のもたらす悲惨さについて考えさせ、平和を尊ぶ心を培いたい〉とあり、本人はもちろん親も戦争体験のない中学生に、戦争への理解を深めさせる平和教材としての意味づけがなされていたことが分かる。

教科書の指導資料に限らず、「仮繃帯所にて」については多くの先行研究があるが、それらが注目してきたのは、第一に、この詩において原爆被害が女学生の傷ついた身体によって表象されていることをどのよう捉えるかという問題である。先行研究の多くは女学生たちの可憐さ、か弱さ、罪のなさに注意を促すものになっている。これについては堀本嘉子（二〇一五）が示唆する通り、ジェンダー論の視点からさらに検討

を重ねる必要がある。先行研究で問題にされてきたことの第二は、この詩に用いられている修辭をどのように捉えるかという問題である。特に〈何故こんな目に遭わねばならぬのか／なぜこんなめにあわねばならぬのか〉といった漢字かな交じりとかな書きによる反復には関心が寄せられてきた。先行研究においては、このような反復が言葉の主体を複数化していることが指摘されてきたが、それが詩全体の修辭とどのような関係にあるのかまでは論じられてこなかった。特に、この詩は〈あなたたち〉という二人称複数形を主語にしているが、こうした特殊な語りの枠組みの中に反復や比喩などが組み込まれていることの意味について検討することも残された課題である。

これらの課題を追究するために、本発表では詩の舞台になっている〈仮繃帯所〉とはどのような場所なのか、また詩の中で語られている〈あなたたち〉とはだれなのかという問題について考察した。

## ◇研究発表②

### 朽木祥「たずねびと」の難しさ

#### ——原爆文学教材の実践を通して

勝倉 明以

本発表では、光村図書の小学校五年生の国語教科書に採録されている原爆文学教材・朽木祥「たずねびと」を論じた。作品分析の後、本教材が内包する問題系を示し、それらへの応答を実践的に行った。

本教材は、住田勝が「第三世代戦争教材」として布置しているが、先行研究の蓄積が多いとは言えない。実践的な視座に立つと、多くの児童の周りに戦争経験者がいることが当たり前ではないことへの留意が必要である。藤田のぼるは、朽木作品を〈生き残り〉と〈受け継ぎ〉のモチーフが散りばめられていると示しており、本作もこの系譜に属する。加藤郁夫が本教材では主人公の変化が語られないことを指摘している通

り、綾の心情が殆ど描かれないことが本教材の難しさの一つである。そのため、「原爆や戦争は良くない」という表層的な読解に収束せず、このような困難の解消が可能な実践を目指した。

教育実践は、児童の興味・関心に寄せながら作品全体を詳細に読み解くことが出来るよう、探究的なカリキュラムデザインを行い、全十時間完了で行った。「たずねびと」の山場である綾と被爆者のおばあさんがやり取りを行う場面では、おばあさんが綾に求めていたものは何かについて繰り返し検討された。その結果「忘れないでいたら同じような目に合わなくて済むかもしれない」等の発言が見られ、自分は寿命が近いため、被爆の記憶が残る続けるよう、次に繋ぐことを求めているという結論に到着した。更に、最終場面に関する議論では「ずっとわすれないでいたら、世界中のだけれも、二度と同じようなめにあわないですむのかもしれない」という綾の心情の変化について焦点化された。綾にとって「楠木アヤ」がただの名前ではなくなったのは、アヤを個人として受け止め、それを忘れないようにしようと思ったからだという結論になった。探究的な学びを通して、自分の意見を更新し、精緻な読解が可能になり、教室という空間で「共感共苦」が呼び起こされる様子を体現していた。綾の思いを児童達も受けとめ、追体験を通してその思いを受け継ぐようとする姿も見られ、「たずねびと」を学ぶ意義を実践的に示した。また、質疑応答の際に貴重なご意見を多数いただいた。この場を借りて心より御礼申し上げる。今後の朽木文学と研究の更なる発展と充実を願ひ、まとめとしたい。

本研究は、「一般財団法人 教育実践学研究所 第二回 教育実践学研究所研究員助成」による成果の一部である

## ◇パネル発表「終末論と核表象」

### 発表①

#### 安部公房『第四間氷期』に潜在する核表象

##### ——スプートニクショックと終末への想像力

岩本 知恵

本発表は、パネル発表「終末論と核表象」の一つとして、安部公房『第四間氷期』に潜在する核表象と終末論的想像力について明らかにし、核表象の面からはあまり注目されてこなかった本作を、核の問題を扱う作品として位置付けることを試みたものである。

発表ではまず、同時代言説と照合することで、『第四間氷期』に影響を与えているスプートニクショックのモチーフと科学技術に関わる描写が、同時代において核や原子力の問題と切り離せないものとして意識されていたことを確認した。ソ連が打ち上げた人工衛星は、当時、軍事利用の危険性が広く認識されており、終末の危機が意識されていたのである。一方で、それゆえに、世界の統一を希望的に幻視する論調も盛んであった。核に対する恐怖が世界平和を実現するという核抑止論が、科学技術に対する楽観論として浮上してきたのである。しかしこうした楽観論は不安感の裏返しであり、安易な終末論を内包していた。当時、核に対する議論でもあった科学技術に対する楽観論は、不安に対する思考停止と終末への具体性のない想像力に支えられていた。

こうした時代状況において、安部は科学技術の推進が一人でおこるものではなく、その背景に政治的な諸事情があることを捉えており、「軍事利用」「平和利用」の二分法による単純な理解を批判していた。安部が危惧していたのは、「軍事利用」と「平和利用」という表面的な対立の内部に共通する終末論的な不安と諦念が、科学技術の発展の背後に常にある政治的な状況によって巻き取られ、容易にファシズムに結び付くという点であった。

このような中で描かれた本作の「終末」が、核戦争による終末ではなく、科学技術の「平和利用」による終末であることは重要である。つまり本作は、「軍事利用」か「平和利用」という対立構造を問い直し、「軍事利用」のみを危険視する問題を明らかにしているのである。また、本作は進歩史観による終末を描くことにより、進歩史観と終末論が共にファシズム体制を強化する危険を持つことを明らかにしている。このように『第四間氷期』は、核表象を潜在させることにより、終末論と進歩史観の近似性と想像力の安直さを批判的に描いていたのである。

なお、質疑応答の場では多くの有益なご意見をいただき、今後研究を進めるにあたって重要な示唆を得ることができました。ご指導、ご助言に心より感謝申し上げます。

## 発表②

### 「核の時代」の小劇場演劇

#### ——「小劇場ブーム」における終末論的表象

加島 正浩

本報告では一九八〇年代の小劇場演劇に多くみられた終末論的表象のあり方を踏まえ、小劇場演劇における終末論的表象の展開を明らかにしようとした。まず当時の小劇場演劇において終末論的表象が溢れていたことを同時代言説によって確認し、特に鴻上尚史・北村想・川村毅の演劇においてそれが顕著であることを指摘した。そのうえで本報告では、川村毅のアンドロイド表象に着眼した。川村は、自分たちが「ニッポン資本主義共和国連邦」の仕掛ける戦争のために開発されたアンドロイドであったことに劇中で気がつく「ニッポン・ウォーズ」（一九八四年）を皮切りに、原発廃炉作業を通じて感情を持ち始めたロボットを登場させる「エフェメラル・エレメンツ」（二〇一七年）・コロナウィルスを思わせるウィルス・GOLLEM・20が蔓延した三〇年後の近未来を描

く「オール・アバウト・Z」（二〇二一年）など、崩壊した世界のなかにアンドロイドをたびたび登場させている。本報告では『ニッポン・ウォーズ』から「オール・アバウト・Z」まで一貫する川村の想像力の内実を明らかにすると同時に、コロナウィルス蔓延という時代の文脈の変化によって川村の想像力の位置づけが変化していることを指摘しようとした。

## 発表③

### 『ピカドン』にみられる終末論と核表象

#### ——絵本・アニメーション・絵本のメディア循環から考える

林 緑子

一九七〇年代の日本は、公害やオイルショックに揺れ、社会不安とともに終末論が盛り上がった時期である。学生運動の挫折を象徴するあさま山荘事件や、『ノストラダムスの大予言』『日本沈没』の大ヒットは、人類滅亡や国家崩壊への想像力が大衆文化を賑わせていた。一方、原爆を扱った『ピカドン』が絵本やアニメーションで発表され、草の根の芸術活動として終末論とは異なる批評性を提示した。丸木位里・俊の絵本は、被爆直後の広島取材した体験に基づき、原爆そのものを描かず日常の断絶を絵と文で示した初版（一九五〇年、ポツダム書店）の復刻版（一九七〇年、原水爆禁止日本国民会議／一九七六年、ろばのみみ編集部）である。絵本には、当事者不在の出来事をどう伝えるかという問題意識が込められているといえる。木下蓮三・小夜子のアニメーション（一九七八年、株式会社スタジオロタス）と絵本（一九七九年、ダイナミックセラーズ出版）は、資料や証言を基に投下から爆風までを具体的に映像化し、電子音楽や効果音で原爆の不気味さを表現した。さらに記録写真を挿入し、フィクションと現実を重ね合わせている。

スペンサー・R・ワートは、『核の恐怖全史』(二〇一七年、人文書院)で、核を考える際にそのイメージが社会的・心理的に強い影響を持つと指摘している。丸木は不可視の惨状を生活描写で示し、木下は可視化された衝撃を映像化することで、まさに異なる形で核のイメージを形成している。絶滅に関する異なる同時期の歴史的事件ホロコーストについて、クロード・ランズマン(一九九五年、未来社)は、表象が不可能なものだと映像で具体的に描くことを批判したのに対し、ユベルマン(二〇〇六年、平凡社)は残されたイメージを手がかりに想像不可能なものを考える必要性を述べている。木下の作品に挿入されるアーカイブ写真は、ジョルジュ・ディディューベルマンの言う不可能性を考えるための媒介として理解できるだろう。さらにリピット水田堯(二〇一三年、月曜社)の議論を参照すれば、『ピカドン』は日常を破壊し身体や家屋など物質の内側を暴露する可視化のプロセスをみせる。さらに、暴露を経て破壊されることにより被害が見えないものとして残される、影のアーカイブを生成する表現とみなせる。

両者を比較すると、①言語的説明の有無、②核表象の直接・間接性、③メディア特性の差異が明確である。三つの『ピカドン』はいずれも日常と核表象を結びつけ、鑑賞者に終末論的想像力とは異なるかたちで倫理的内省を促すといえる。こうした比較は、核表象や記憶を扱う文化研究において、不可視と可視の境界を問い直す重要な視座を提供すると思われる。

## 彙報

### 第七五回 原爆文学研究会

○日時 二〇二五年八月九日(土)・二〇二五年八月一〇日(日)

※対面とオンライン(Zoom)のハイブリッド形式で開催

○会場 広島大学東千田キャンパス・東千田未来創生センターM303 講義室

○特別シンポジウム「アート・コレクティヴ「爆心へ／To Hypocenter」」

※エコクリティシズム研究学会と共催

### ○研究発表①

教科書と「原爆文学」V——峠三吉「仮繻帯所にて」を中心に

中野 和典

### ○研究発表②

朽木祥「たずねびと」の難しさ——原爆文学教材の実践を通して

勝倉 明以

### ○パネル発表「終末論と核表象」

#### 発表①

安部公房『第四間氷期』に潜在する核表象

——スプートニクショックと終末への想像力

岩本 知恵

#### 発表②

「核の時代」の小劇場演劇

——「小劇場ブーム」における終末論的表象

加島 正浩

#### 発表③

『ピカドン』にみられる終末論と核表象

——絵本・アニメーション・絵本のメディア循環から考える

林 緑子

## 編集後記

第七五号の研究会報をお届けします。巻頭エッセイは、会報の編集を担当した後山が執筆いたしました。一年以上前になりますが、せっかくハワイ大学マノア校、ミルトン図書館に設立されている梶山コレクションを訪問したので、その簡易な報告をこの場で共有できればと思い執筆いたしました。ハワイ大学の訪問記について、筆が進まないなかで、いくらか過去の会報を読み直していたところ、会報担当の仲間である堀本さんのエッセイを読んで、コロナ前のハワイの様子を楽しく拝読し、筆が進むようになりました。

さて、第七五回研究会の二日目は、大雨で各種交通機関が麻痺するなかでの開催となりました。こうした日に会場まで足を運んで下さった皆様に心より感謝申し上げます。また、オンラインで参加いただいた皆様につきましても、多くの質問等を頂戴し、研究会を支えていただき御礼申し上げます。

世話人となつてから数年が経過しましたが、ここ一・二年は体調面が安定せず、ほかの世話人の皆様にはご迷惑をおかけしたことを思います。皆様の支えのおかげで世話人の活動を続けていられることに心から御礼申し上げます。

次回の研究会は長崎大学にて、青来有一さんをお呼びした盛り沢山な企画となっております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

最後になりましたが、第七五回研究会にご参加いただいた皆様、会報への執筆をご快諾いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

（後山 剛毅）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四・〇一八〇 福岡市城南区七隈八・一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 URL <http://www.genbunken.net>